

相馬御風略年譜

和 暦（西 暦）年 齢	主 な 出 来 事
明治16年(1883) 0歳	7月10日、糸魚川町大町52番地に生まれる。父徳治郎、母チヨの長男で一人息子、昌治と命名。チヨ腎臓炎のため、乳母の手により養育。家は、代々神社仏閣建築の棟梁で、この地区屈指の旧家。父は後に第4代糸魚川町長を務めた。
明治22年(1889) 6歳	糸魚川町立尋常小学校に入学。明治26年同校卒業。
明治26年(1893) 10歳	組合立糸魚川高等小学校に入学。
明治27年(1894) 11歳	この頃より糸魚川の俳人歌人の指導で、俳句短歌を詠み始める。「窓竹」といった。
明治29年(1896) 13歳	糸魚川高等小学校3年で中途退学し、中頸城郡尋常中学校（現県立高田高等学校）へ入学。
明治30年(1897) 14歳	俳人内藤鳴雪に添削を受ける。
明治31年(1898) 15歳	腸チフスにかかり、中頸城郡病院に入院。病気回復後、旧高田藩士荘田直道の家塾に移る。そこで、徹底した古武士的訓育を受け、それまで脆弱であった心身を鍛える。
明治32年(1899) 16歳	国語教師下村莢（千王伎・千別）のもとで、本格的に短歌を学ぶ。12月17日、母チヨ危篤の知らせで帰省。翌日チヨ逝去。（享年41歳）。
明治33年(1900) 17歳	高田中学校修養会の文芸部助手となる。秋ころから「御風」といった。
明治34年(1901) 18歳	高田中学校（現高田高校）を卒業。第三高等学校（現京都大学）受験のため京都に行くが失敗。そこで出会った真下飛泉と親交を結び、飛泉の紹介で与謝野鉄幹が主宰する「新詩社」に入会する。
明治35年(1902) 19歳	佐佐木信綱が主催する竹柏会新年歌会に出席。そこで詠んだ歌が「秀才文壇」に一等入選、写真が掲載される。また、自筆歌集「春雨傘」が、表紙絵・真下飛泉、校閲・与謝野鉄幹により完成する。4月、東京専門学校（現早稲田大学）高等予科に入学。同学年には會津八一、野尻抱影、楠山正雄などがいた。
明治36年(1903) 20歳	新詩社を脱退し、前田林外、岩野泡鳴などと東京純文社を組織し、機関紙「白百合」を発刊する。
明治37年(1904) 21歳	目白僧園の釈雲照律師を知り、3年間教えを受ける。その後に及ぶ大きな影響を受けた。
明治38年(1905) 22歳	歌集『睡蓮』を東京純文社から自費出版。
明治39年(1906) 23歳	早稲田大学部文学科卒業。島村抱月によって再刊された「早稲田文学」の編集部「早稲田文学社」に片上天弦、白松南山らと共に入り、自然主義評論家の第一歩を踏み出す。

和 暦（西 暦）年 齢	主 な 出 来 事
明治40年(1907) 24歳	早稲田大学校歌「都の西北」を作詞。三木露風、人見東明、野口雨情らと「早稲田詩社」を興す。藤田茂吉次女テルと結婚。
明治41年(1908) 25歳	『御風詩集』、ツルゲーネフ作御風訳『その前夜』を出版。「早稲田文学」3月号に「詩界の根本的革新」、5月号に「瘦犬」を発表して、口語自由詩を提唱。この夏、中村星湖と入院中の国木田独歩を見舞う。
明治42年(1909) 26歳	ツルゲーネフ作御風訳『父と子』、『ゴーリキー集』出版。
明治44年(1911) 28歳	『論文作法』、『新生活』出版。早稲田大学講師となる。長男昌徳、1歳3か月で死去。糸魚川の大火で生家類焼。
明治45年(1912) 29歳	論集『黎明期の文学』出版。
大正2年(1913) 30歳	講話『新文学初歩』、トルストイ作御風訳『アンナカレニナ』、『七死刑囚物語』、小説『峠』出版。島村抱月が結成した芸術座に、中村吉蔵、楠山正雄、松井須磨子らと共に参加。
大正3年(1914) 31歳	『トルストイの戦争と平和』、ツルゲーネフ作御風訳『処女地』、論集『自我生活と文学』、随筆『毒菓の壺』、同『第一歩』、童話『人魚の歌』出版。芸術座公演「復活」の劇中歌「カチューシャの唄」を1番島村抱月、2番以下を御風が作詞、作曲は中山晋平。
大正4年(1915) 32歳	トルストイ作御風訳『性慾論』、同『我が懺悔』、『御風論集』、『我等如何に生くべきか』、『個人主義思潮』、『ゴーリキイ』出版。精神的苦悩次第に濃くなり肉体的健康も損なう。3月、家族（父、妻、子供）が郷里糸魚川へ移住。「早稲田文学」11月号発売禁止処分を受ける。
大正5年(1916) 33歳	「早稲田文学」1月号発売禁止処分。3月、心身の苦悩が限界に達して、故郷糸魚川に退住する。その心境を告白した『還元録』を出版。トルストイ作御風訳『芸術論』、同『宗教論』、同『ハヂ・ムラート』、パウル・ビルコフ作御風訳『トルストイ伝』、『凡人浄土』出版。良寛の研究に着手。郷里の有志と歌会「木蔭会」を組織する。
大正6年(1917) 34歳	良寛研究のため旅に出ることが多くなる。7月、窪田空穂、前田晃来訪。この地の奴奈川姫伝説をまとめようとする。『田園春秋』出版。
大正7年(1918) 35歳	8月、父徳治郎逝去。11月、師島村抱月逝去し、その葬儀に参列。以後、終生上京しなかった。良寛研究の代表作『大愚良寛』、『良寛和尚詩歌集』出版。
大正8年(1919) 36歳	安田鞞彦夫妻と良寛遺跡を巡遊する。『良寛和尚遺墨集』出版。4男元雄、3歳11か月で死去。

和 暦（西 暦）年 齢	主 な 出 来 事
大正9年(1920) 37歳	考古学、仏教美術などの研究を始める。郷土資料の収集も行う。『良寛和尚尺牘』、『象牙の笛』出版。
大正10年(1921) 38歳	西頸城郡史料展覧会開催、大会委員長。
大正11年(1922) 39歳	童謡「春よ来い」を作詞。
大正12年(1923) 40歳	御風の尽力により水保の木造十一面観音立像、甲種国宝に指定。9月、関東大震災がおこり、親戚が避難してくる。避難してきた彫刻家・澤田政廣と交流する。
大正13年(1924) 41歳	この頃から昭和6年まで長野、富山、石川県など県外への講演に出向くことが多くなる。『如何にたのしむべきか』、『生と死と愛』、『雑草苑』出版。
大正14年(1925) 42歳	『良寛和尚歌集』、『一茶と良寛と芭蕉』、『野を歩む者』出版。
大正15年(1926) 43歳	5月、退耕十周年記念行事が行われ、『御風歌集』が出版される。『良寛和尚万葉短歌抄』、『第二の自然』出版。
昭和2年(1927) 44歳	『一茶随筆集』、『曙覧と愚庵』、『静と動との間』出版。
昭和3年(1928) 45歳	木蔭会機関誌「木蔭歌集」創刊。8月末、大火のため土蔵一棟を残し類焼、蔵書の大半、研究資料をことごとく焼失。特に新構想「日本美の研究」に関する文献資料、草稿の全てを失い大打撃を受ける。12月、新居落成。
昭和4年(1929) 46歳	『義人生田萬の生涯と詩歌』、『訓訳良寛詩集』出版。日本大学校歌を作詞。
昭和5年(1930) 47歳	8月、直指院境内に良寛詩碑建立。10月、一人雑誌「野を歩む者」創刊。『貞心と千代と蓮月』、『良寛さま』、歌集『月見ぐさ』出版。5男茂、3か月足らずで死去。
昭和6年(1931) 48歳	『郷土に語る』、『良寛と蕩児』出版。
昭和7年(1932) 49歳	7月、妻テル長年の持病腎臓炎悪化し、病床に臥す。人手を借りず御風一人で看護に努めたが、御風誕生日7月10日に逝去。御風の悲嘆この上なく、自身も病床につくことが多くなり執筆も進まなかった。テル遺稿集『人間最後の姿』を共著として出版。
昭和8年(1933) 50歳	『馬鹿一百人』、『西行さま』、『人間・世間・自然』出版。
昭和9年(1934) 51歳	『砂に坐して語る』、『日のさす方へ』、『一人想ふ』出版。「野を歩む者」の発行を年4回とする。倉若ミワ相馬家に入る。
昭和10年(1935) 52歳	『良寛百考』、『続良寛さま』、『道限りなし』出版。
昭和11年(1936) 53歳	『相馬御風随筆全集』全八巻刊行。
昭和12年(1937) 54歳	日中戦争が勃発し知己縁辺に戦地へ赴くもの相次ぐ。『御風歌謡集』、『糸魚川より』出版。

和 暦（西 暦）年 齢	主 な 出 来 事
昭和13年(1938) 55歳	北大路魯山人御風宅訪問。『郷土人生読本』、『郷土文学読本』、『良寛と貞心』、『動く田園』、『良寛和尚―歴代歌人研究―』出版。鎌上竹雄にヒスイ産地、小滝川の探索を依頼。
昭和14年(1939) 56歳	4月、東京日本橋倶楽部で御風染筆展覧会を開催。『土に祈る』、『同拝同行』、『日は昇る』出版。
昭和15年(1940) 57歳	11月、小川未明夫妻来訪。「野を歩む者」の会新潟支部、県立図書館前庭に良寛書碑建立。『先人を語る』、『辺土に想ふ』出版。国民精神総動員新潟県本部参加になる。
昭和16年(1941) 58歳	『一茶と良寛』、『一茶素描』、『良寛を語る』出版。
昭和17年(1942) 59歳	用紙不足と病気のため木蔭会を解散し、機関誌「木かげ」を廃刊。詠草は、「野を歩む者」木かげ集に引き継ぐ。『丘に立ちて』、『歌話』出版。
昭和18年(1943) 60歳	『雪中佳日』、『日出チャンとギン公』、『ふるさと随想』、『神国の朝』出版。
昭和19年(1944) 61歳	3月、重い大腸カタルを患う。『土の子海の子』出版。
昭和20年(1945) 62歳	外傷により敗血症になる。東京空襲のため孫など疎開。8月、終戦、3男皓帰還。
昭和21年(1946) 63歳	5月、生方敏郎、7月、會津八一の旧友2人が相次いで来訪し、往時をなつかしむ。『静に想ふ』出版。左眼失明状態になる。
昭和22年(1947) 64歳	この年より常時気分がすぐれず、知人、来訪者に面会することもまれになり、外出も一切しなくなる。
昭和23年(1948) 65歳	5月、急激な下痢状態から病状が悪化し、一時、危篤状態に陥ったが奇跡的に命をとりとめる。
昭和24年(1949) 66歳	5月、多量の鼻出血がある。年末、腸を痛め、病臥のまま年を越す。「野を歩む者」以外はほとんど執筆せず、揮筆することもまれになる。しかし、枕頭にメモ用紙を置いて歌作をやめなかった。『待春記』出版。
昭和25年(1950)	春ごろ、やや小康を得て、気分爽快の日々が続く。4月「野を歩む者」90号発行。創刊以来、この最後の号に至るまで執筆、編集する。5月7日、客を見送った後、突然脳溢血で倒れ、翌8日、永眠。法名、大空院文誉白雲御風居士。糸魚川町清崎相馬家代々の墓に葬る。9月、家族、友人、知人の手により「野を歩む者」追悼号が発行された。